

雪椿通信

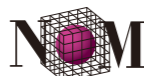
SPRING & SUMMER 2020

vol. 53

コレクション
展示室より



鎌木清方(桜姫)1923年 当館蔵
©Akio Nemoto



今年度のコレクション展ラインナップから
個展形式の3つの展示をご紹介します。

田畑あきら子 火だるまのなかの白い道 会期：6月23日(火)～10月4日(日)

今年1月、東京都現代美術館の展覧会で、
詩人・吉増剛造の「大草稿」の中に田畑あき
ら子の名前を見つけました。それが書かれた
日付を見ると、2019年8月28日、29日。田
畑あきら子が1969年8月27日に亡くなっ
てから50年、節目の夏の日に書かれたものよ
うでした。

さて、田畑あきら子が残したわずかな作品
のほとんどは、彼女が亡くなって間もない頃
に、当館の前身、新潟県美術博物館にまと
めて寄贈されました。美大を卒業して間もな
い、たった一度個展を開いただけの駆け出し
の画家に過ぎなかった彼女の作品が、このよ
うに収蔵されるのはほとんど奇跡のことのよ
うに思われます。それは、あきら子の作品に
感銘を受けた画家・木下晋が橋渡しとなって
実現したことでした。木下はその後、「気まぐ
れ美術館」の洲之内徹に紹介し、田畑あきら子
の名前が広く知られるきっかけも作っています。彼
女の作品は木下をはじめ、彼女と彼女の作品に

惚れこんだ人々によって、大切に語り伝えられて
きたのです。吉増剛造も、その役割を担ってきた
一人でした。

詩人でもあった田畑あきら子の作品に
は、ときに言葉や記号が描き込まれ、独自の
絵画空間が広がります。今もなお人々を魅了
して止まない、あきら子の作品をご堪能くだ
さい。

(美術学芸員 松本奈穂子)

生誕110年 佐藤哲三と蒲原の画家達 会期：10月13日(火)～12月20日(日)

蒲原に育った洋画家、佐藤哲三(1910-
1954)は、若くして画家を志し、昭和2年
(1927)大調和展での落選を契機に梅原龍
三郎と出会い、以降、知遇を得ました。しか
し、梅原にその後を嚮望されながらも、上京
して学ぶことをせず、郷土蒲原に留まり、農
村社会とそこに生きる人間をテーマに描き続
けました。哲三の作品には、自分を育てた蒲
原の大地、そして厳しい環境や状況の中で一
生懸命に生きる農婦や地元の人達に温かい眼
差しが注がれ、郷土愛に満ち溢れています。

本年は、この哲三の生誕110年に当たりま
す。それを記念して、当館が所蔵する全23



田畑あきら子(作品)1966-67年 当館蔵

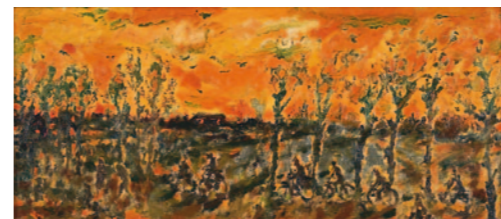
点の哲三作品により顧みたいと思います。併
せて兄・重義の作品をはじめ、互いに影響し
あった富樫寅平、長谷川武雄、末松正樹ら、
蒲原の仲間達の同時代の所蔵作品も展示し、
蒲原の美術状況の一端もご覧いただけます。

(専門学芸員 松矢国憲)

中村忠二 詩情と激情 会期：10月13日(火)～12月20日(日)

2005年に実業家・相沢直人氏より、当館
に一括寄贈された相澤コレクションの中に
中村忠二の作品がおおよそ50点含まれていま
す。忠二は現在の兵庫県姫路市に生まれ、
1915年、大阪で電信通信手としての職を
得ますが、この頃より美術に興味を持ち、
1919年20歳の時に上京します。念願の日本
美術学校に入学しますが、学費が払えず翌年
退学、以降、各地を転々としながら、水彩画
連盟や光風会、国画会に出品を続け、美術作
家として独自の地位を確立した作家です。
晩年の20年間を練馬区内で過ごしたことか
ら、2018年6月「生誕120年 オオイナル
シュウネン 中村忠二展」が練馬区立美術館
で開催されました。

忠二の代表的な仕事の1つにモノタイプが



佐藤哲三(帰路)1954年 当館蔵

あります。版画の技法の1つで、60歳の時に
知り合いの画家・水波博から教わったよう
です。ガラスや金属板に直接着色しそれを紙に
転写する技法のため、一般的な版画のよう
にたくさん刷ることはできません。しかし、通
常の版画にはない荒々しい表現ができること
もあり、忠二は独学で研究を続け、味わい深
い作品を次々と生みだしていきました。

今回の展示では「詩情と激情」と題し
て、激しい筆致ながらも叙情性豊かな、忠二
の独特な世界をモノタイプ作品を中心に紹介
します。

(学芸課長 藤田裕彦)



中村忠二(崖シリーズNo.5[死])1966年 当館蔵

館長所感

「アレッ、近美さん、どうしたの?」—こうした声
が聞こえてきそうです。本年度の企画展のスケ
ジュールが決まりました。4月の「サンダーソ
ンアーカイブ ウィリアム・モリスと英国の壁紙展」
を皮切りに3本を開催する予定です。いつもより
1本少ない上に、3本目の「Viva Video!久保田
成子展」は来年3月下旬の開催予定です。2本
目の「三沢厚彦 ANIMALS IN NAGAOKA」展
(7-9月予定)が終了してからおよそ半年のイン
ターバルがあるものですから、違和感を持つ方も
おられるでしょう。県の緊縮財政を反映して年間
の企画展2-3本、という変則的な形が何年か続
くかもしれません。

本年度もバラエティに富んだ企画展となりま
した。ウィリアム・モリス展は、人々を魅了するデ
ザインの中から壁紙を中心に紹介します。「生活
の中に美を」と提唱した近代デザインの先駆者モ
リス。自然の草花をモチーフにした作品は見る者
の心を癒してくれます。三沢厚彦展では、様々な
動物をモチーフに樟を等身大に彫り出した木彫
が圧倒的な存在感で迫ります。長岡展では国内
初の新作が登場します。ご期待ください。

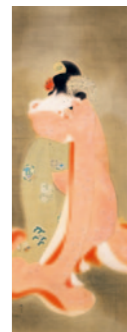
3本目は、本県が生んだ著名な国際的アー
ティスト・久保田成子(旧巻町生まれ)のすぐれた
業績を、郷土の美術館として広く顕彰するもの
です。久保田は映像と彫刻を組み合わせたヴィデ
オ彫刻という新しい境地に挑み、独創性と先駆
性で高い評価を得た作家です。現代アートの魅
力を堪能して頂きたいと考えています。展覧会は
当館開催後、多くのファンが待つ大阪市の国立
国際美術館、東京都現代美術館を巡回します。

編集部からのひとこと

遅ればせながら、当館でもようやくツイッターを始めまし
た。SNS 初心者のため、試行錯誤しながら更新しています。
ただいまフォロー大募集中!ぜひフォローをお願いします。
@niigata_kinbi

(美術学芸員 松本奈穂子)

企画展は若干少なくなりましたが、年間を通し
てご覧いただいているコレクション展は充実のラ
インナップ。第1期から第4期までいずれも秀作、
名品ぞろいです。皆さんのご来場をお待ちしてい
ます。(館長 木村哲郎)



表紙の作品
やわらかな薄紅色の美し
い桜模様のきものを身につ
けながらも、描かれた女性
の顔は苦痛にゆがみ、裸足
で身を大きくくねらせていま
す。本作は芝居好きの作者
鎌木清方が歌舞伎「桜姫東
文章」を題材にして描いた
作品です。

桜姫は良家の姫の身であ
りながら、数奇な運命に弄ば
れ、女郎にまで身を落としま
す。上等なきものや豪華な髪
簪、だらりに結んだ帯は生
まれのよい姫であることを
表します。その一方で襦袢は
鮮やかな赤い色をしており、
物語の核心ともいえる愛欲
の強さを思わせるとともに、
画面を引き締める役割も果
たしています。絵絹の裏には
金箔が押され(裏箔)、異常
な桜姫の境遇を暗示してい
ます。歌舞伎好きで女性の
装いにも敏感な清方ならではの
表現です。(専門学芸員 宮下東子)

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第53号

編集・発行 THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL0258-28-4111代 FAX0258-28-4115
https://kinbi.pref.niigata.lg.jp/
公式ツイッター @niigata_kinbi

制作・印刷 株式会社 山田写真製版所

〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14

リデザイン 長岡造形大学 太田朝陽、畔上祐香、大浦有夏、田中雄大

発行日 2020年4月22日

特集1 三沢厚彦 ANIMALS IN NAGAOKA



三沢厚彦《Animal 2018-01》2018年
樟、油彩 撮影：大沼ジョージ

「三沢厚彦 ANIMALS IN NAGAOKA」が
いよいよこの夏、開催されます。
三沢厚彦さんについて、展覧会について、
その魅力や見所などを紹介します。

三沢厚彦さん

三沢厚彦さん(1961-)は京都市生まれ。幼
い頃より京都や奈良の古刹を度々訪れ、美術書
や画集を通し木彫の魅力にふれ、小学生の卒業
アルバムには「彫刻家になりたい」と記します。
高校、大学で彫刻を学び、東京藝術大学大学院
を修了。一方で、若いうちからロックやジャズ、
ポップミュージックにも親しみ、美術同様音楽
に対する造詣も深めています。

2000年からは「アニマルズ」シリーズの制作
を始めます。2001年にはこのシリーズにより第20回平櫛田中賞を受賞し、評価を確立。
多数のグループ展やアートイベントに参加すると共に、全国の美術館で「アニマルズ」展
を開催。各地で好評を博し、現在に至ります。2019年には《Animal 2018-01》が第41
回中原悌二郎賞を受賞。現在の日本を代表する彫刻家のひとりです。



2020年2月、自宅兼アトリエにて。

アニマルズ

見れば見るほど不思議な「アニマルズ」。
よく知った動物の姿をしているようで、どこ
か違うような印象を与え、見る者を惹き付け
ます。

三沢さんは、大学院修了後はコンセプト
アルな作品等を制作していましたが、やがて
「木を彫りたい」という素朴な欲求から、動
物の全身像をつくるようになっていきまし

た。「動物はみんなが知っているモチーフで
あると同時にその不可解さもはかりしれない
ものがありそこが面白い」と、動物の魅力に
ついて語る三沢さん。「アニマルズ」のモ
チーフは多岐に渡りますが、いずれも実際の
動物を写実的に表現しようとはしていません。
この不思議な動物たちは、素材と向き合
う中、三沢さんの自由な想像により生み出さ
れます。再現に依らず、けれども作品たちが
リアリティをもって迫ってくるのは、三沢さん
の捉える動物の「らしさ」が独自の表現で
形づくられ、強烈な印象を放つからなのかも
しれません。

「アニマルズ」に対峙したときに何を思う
のか、何を感じるのか。実物との出会いが楽
しみになってきませんか？

作品は、どうやってつくられている？

彫刻作品「アニマルズ」の素材となるの
が、樟(クスノキ)という木材です。仏像など
にも用いられる、加工のしやすい木材で、独
特の芳香を放ちます。

三沢さんは、大型作品の制作は、神奈川県
内にある製材所内のアトリエで行っていま
す。はじめにスケッチをすることもあれば、
つくりながら考えることもあるそう。動物の
多様な姿にあわせて寄木をし、墨で下描きを
入れて電動チェーンソー等で大まかな形を彫
り出していきます。その後の細かい部分は、
鑿(のみ)を使って、彫り進めていきます。

着彩は油絵具で行われ、鑿跡と合わせり、
特徴的な質感を生み出します。着彩後に、ま
た彫り進めることもあり、納得がいくまで作
業を繰り返していきます。

長い道のりを経て完成する「アニマルズ」。
制作にかかる「時」も伝わってくるか
のようです。



三沢厚彦《Animal 2008-02》2008年 樟、油彩 撮影：内田芳孝



上：制作途中の
《Animal 2018-01》。
まだ角が無いですね。
下：鑿跡がよくわかります。
下描きの線が残っています。



新潟(長岡)展準備中

「彫刻作品は
アトリエで完成
を迎える。そし
て展示すること
により、もうひ
とつの完成を迎
える」一。三沢
さんは全国の美
術館で「アニマ
ルズ」展を開催
してきましたが
、彫刻作品と
展示空間との関
係性を重視し、
会場ごとに異
なる展示プラン
を展開してきま
した。



三沢厚彦《Animal 2016-01》
2016年 樟、油彩 撮影：三沢厚彦

現在、新潟(長岡)展開催にあたり、三沢さん
と何度も打ち合わせをしながら、展示プラン
を練っているところです。今回の展覧会では、
およそ100点の彫刻や絵画を複数の区画に分
けて紹介。代表作《Animal 2018-01》(麒麟)
のほか、夏の開催に相応しく(?)《Fish 2015-01》
(サメ)、また当館会場で初登場となる新作も
展示される予定です。これらの作品が会場の
空間とどう結びつくのでしょうか。

また今回、同時開催するコレクション展
「近代美術館の名品」では、アニマルズと三沢

さんの個人コレクションを当館の所蔵品と
ともに特別展示します。三沢さんの感性が垣
見えるこちらのコラボレーションも見逃せない
内容になるでしょう。

新潟県立近代美術館全体の空間で、展開さ
れる「三沢ワールド」に、ぜひご期待ください。
(主任学芸員 伊澤朋美)



三沢厚彦《Fish 2015-01》
2015年 樟、油彩 撮影：三沢厚彦



三沢厚彦《春の祭典》2016年 パネル、アクリル、色鉛筆 撮影：高橋健治
©Atsuhiko Misawa, Courtesy of Nishimura Gallery



三沢厚彦《Animal 2009-02》
2009年 樟、油彩 撮影：三沢厚彦

企画展 「三沢厚彦 ANIMALS IN NAGAOKA」 7月4日(土)～9月6日(日)

同時開催 第2期コレクション展 6月23日(火)～10月4日(日)
【展示室1・2】 近代美術館の名品
※9/6まで一部三沢厚彦展関連展示になります

企画展 「Viva Video! 久保田成子展」 2021年3月20日(土)～6月6日(日) ※予定

特集2 久保田成子

—新潟生まれの不屈のアーティスト—

新潟出身のビデオ・アーティスト、久保田成子(1937-2015)をご存知でしょうか。2015年の新潟日報の連載「人ものがたり」をご覧になった方は覚えていらっしゃるかも知れませんが、新潟ではこれまで作品に接する機会に恵まれず、その名前すら知る人は多くないのが実状です。しかし、ニューヨークを拠点に欧米各地で作品を発表し、ドイツで4年に1度開催される現代美術の国際展ドクメンタに招待出品するなど、1970年代後半からその活動は国際的に評価されていました。

そもそも、久保田成子はなぜアメリカに渡ったのでしょうか？それは、1963年に東京の内科画廊で開催された個展に対する批評が一つも出なかったことに落胆したためと、作家本人が語っています。高校時代まで新潟県内で過ごした久保田成子は、東京教育大学(現・筑波大学)に進学後、叔母で前衛舞踊家であった邦千谷の影響もあり、前衛的な芸術表現に強い関心を抱きます。1960年代前半は、オノ・ヨーコやジョン・ケージが草月会館で公演を行い、読売アンデパンダン展や路上でもパフォーマンスが盛んに行われるなど、前衛美術の全盛期でした。そんな中、自らの作品にまったく関心を示さない日本の美術界に愛想を尽かし、オノ・ヨーコを介して交流をもったフルクサスの代表ジョージ・マチューナスの誘いで、1964年の夏にニューヨークへ渡ることを決意します。これが彼女の芸術家人生の真の始まりでした。

渡米直後は、フルクサスに典型的なマルチプル作品やパフォーマンスによる表現活動を行っていましたが、1970年頃からは映像を作品に取り入れ始め、76年の個展で発表した連作「デュシャンピアナ」で一躍注目を集める存在となりました。

「デュシャンピアナ」はマルセル・デュシャンとの邂逅から生まれたシリーズで、立体作品であると同時に彼女が撮影した映像が重要な構成要素として組み込まれており、ビデオという最先端のメディアと彫刻が見事に融合した造形作品です。同シリーズを発表した1976年の個展に際し、画廊主のルネ・ブロックがそれらを称した「ビデオ彫刻」という言葉は、彼女の作品の代名詞となります。そして、《デュシャンピアナ：階段を降りるヌード》(1976)はビデオ・インスタレーションとして初めてニューヨーク近代美術館に収蔵された、美術史上記念碑的な作品となりました。

その後、1991-92年にアメリカ、ドイツ、日本を国際巡回する個展が開催され、95年には外国人として初めてマヤ・デレン賞を受賞するなど、久保田成子の評価は決定的なものとなります。しかし、夫のナムジュン・バイクが1996年に脳梗塞で左半身に麻痺を負ってからはそのサポートにすべての時間を捧げ、彼の死後は自身も闘病を続ける過酷な状況の中で、最愛の夫をテーマに最後の連作《ナムジュン・バイク》(2007)を制作しました。その壮絶な人生と作品を紹介する公立美術館で初めての大回顧展は、当館を皮切りに新潟・大阪・東京の3都市で開催の予定です。展覧会をご覧になる前に、共著である『私の愛、ナムジュン・バイク』(2013年、平凡社)もぜひ一読ください！

(主任学芸員 濱田真由美)



1



2

1. 久保田成子と《ビデオ・ボエム》(1968-76) Mary Lucier ©1975
2. 久保田成子《デュシャンピアナ：階段を降りるヌード》1976年 ニューヨーク近代美術館蔵